

日本漢文學百家集

王焱 編

388



北京燕山出版社

王焱 主編

日本漢文學百家集
388



北京燕山出版社

第三八八册

鳴溪先生詩集 一卷 西田龍太著 大正七年	……	一
觀海文鈔 二卷 池穀盈進著 大正九年	……	六三
松窗詩鈔 上下卷 岡田英著 明治二十五年	……	一六五
晚翠居詩草 一卷 附錄 湯河元臣著 大正十四年	……	二九一

鳴溪先生詩集

鳴溪先生
詩集

亦正七律
物正集正

鳴溪詩集出版始末報告

拜啓鳴溪先生詩集出版を了し配本の都合に相成候間一應其願未及御報告候

鳴溪君逝去せられ其詩文稿の存する者稀有なるは、知友の愛惜に禁へざる所に候處其後医座より自筆の詩稿を尊見致候間何人も之を珍とせざる者なく故東亞實進社主角八平次君主として記念出版の議を唱へて多額の賛成を得、實進社内に鳴溪紀念會を設け鳴溪君知友の獻金によりて其出版を計畫したるは大正六年晩秋の頃に有之候

鳴溪先生詩集は鳴溪君の手稿其體を本邦特有の木版に刻み鳴溪君手筆の面影を存する計畫にして岡二郎君等の斡旋により優秀なる木版彫刻工の手によりて刻成せられ、見本として假りに二百部を印行し之を關係者間に配布せるは大正七年八月の頃に有之候

然るに右見本出版の後角谷君等は折角新しく立派な遺稿出来たるに相當の序文なきは畫龍に點睛を缺くの憾ありとし鳴溪君の親友たる某文學博士に序文を依頼し其稿成るを待つて出版せんとし某博士も一旦之を承諾せられたるも感興起らざるにや容易に起稿せられず、彼是在村中角谷君も亦貴泉の客となり、以て倍程料を來すに至り申候

吾等同人右の事情を知りながら何時迄も之を其體に附し一面は折角の好紀念事業を中廢し他面は多數同情者の厚意に辜負するに及びや種々協議の上本年正月十日鳴溪君第五週忌辰を以て法要を鶴見總持寺に開き法要後來會者一同と協議し、序文の有無如何に拘らず速に第二回の印刷を行ひ寄附者並に關係者に類々殘部を各地主要圖書館に寄附すること、同時に上野岩太郎、鎌倉鐵蔵、森茂の三名を鳴溪會委員となし將來同會の維持並に所定製本の管理に當らしむること、相成申候尙は當日來會者左の如くに御座候

原田鐵蔵、淺野虎三郎、上野岩太郎、水野梅曉、河野秀男、荒川悳次、河村善登、井出大三郎、川島浪速代人、安河内弘、永末新太郎、角谷夫人、松本菊熊、西田忠次、宮島大八、森茂右次郎により早速出版製本に着手致候得共用紙買入の都合印版手の都合にて先日漸く製本出来今日を以て配本の都合に相成申候

本出版に關する寄附金收入並に支出費用は別紙決算の通りに有之其殘額四百餘圓は本委員にて保管し之を銀行に預金し墓地管理其他の費用に支出の筈に候

東亞實進社が角谷君在世中勿論其殘稿も始終本出版に關し面倒なる事務を處辨せられ爲に大に便宜を得たるは吾等の感謝する所に有之候

又木版彫刻は岡二郎君最も斡旋せられ候間便宜上同木版は同氏に保管を託し置候、今後更に出版の必要ある場合は何時にても出版出来る次第に有之候

今回出版の五百部は各寄附者諸君並に關係者に配附し殘餘は各圖書館等に便宜寄附の筈に有之候先は右及御報告候也

大正九年五月

森 茂
鎌田 義喜
上野岩太郎

鳴溪詩集出版費決算報告書

一金九百八拾圓也

收入全額

右ノ裏面掲記ノ如ク贊助金收入全額ニシテ之ニ對スル支出ハ左ノ如シ

第一回印刷配附支出明細書

金百參拾七圓四拾錢	詩集彫刻代	金八圓	澁表紙二百枚代
金四拾參圓七拾五錢	用紙六千枚代	金七圓八拾錢	二百部印刷代
金七圓八拾錢	二百部製本代	金貳圓八拾錢	發送料
金參拾五錢	鳴溪紀念會印一個	金壹圓七拾貳錢	半紙三十一帖代
金壹圓貳拾四錢	端書代	金六拾貳錢	複寫端書三帖
金六拾參錢	封筒五百枚代	金拾貳圓四拾四錢	通信切手代
金八拾錢	膠寫用墨汁代	金五圓八拾錢	關係者慰勞費

合計金貳百參拾壹圓貳拾參錢

差引殘金七百四拾八圓七拾七錢也

第二回印刷配附其他支出明細書

金參拾圓	五週年法會料	金五拾貳圓貳拾五錢	澁表紙五百枚代
金百貳拾壹圓六拾壹錢	五百部用紙代	金貳拾五圓五拾錢	印刷代
金六拾五圓	五百部製本代	金拾圓	送料
金四圓	送附用包紙代	金拾圓	報告印刷代(豫算)

合計金壹百拾八圓參拾六錢

差引殘金四百參拾圓四拾壹錢也

右ノ殘金ハ鳴溪會委員ノ手ニ保管シ將來ノ法會並ニ墓地保存等ノ費用ニ充テ此等費途ニ關シテ
六期ニ至リ更ニ報告ヲ行フヘシ

大正九年五月

鳴溪會委員

西田鳴溪傳

西肥岡直養撰

長碕西海之商埠外舶出入五方雜處欲攫奇利者
如水赴壑或空手致暴富或積鉅貲而一敗不能起
人情機詐習尚奢淫鳴溪生長其閒欲起而矯正之
顧三百年積習已不可挽於是慨然去鄉不復歸其
行事有足傳者君姓西田氏名龍太鳴溪其號深沈
好書獨坐一室昕夕不離案夙游碩水楠本先生門
受程朱學專志格知心體躬行不拘拘箋註疏釋而
其所自得者則深矣於書無所不讀至忠臣孝子隱

逸之事尤致意其所著之書必東西訪求不獲不已以教諭歷任各學校所至諸生心服然拙於迎合皆不久而去曾爲同文書院教習航上海後應清國聘赴保定又以其暇弔沅湘訪西子湖經數年而歸途望長碕曰此吾釣遊地也然擇不處仁聖訓所誡遂棄去居西京晚迺移東京終身不娶矯然拔俗好寓山寺文具茶器外無長物偶得書畫玩好亦不珍惜往往爲人持去自謂筆硯精良儒生之福已足不必假乎外以樂乎中也篤友誼一諾不忘雖小事必竭

盡心力以赴之成而後止不以生死二其心友至輒
傾囊盡歡值空乏則一淪之歿終日談學不倦交遊
皆清修高傑之士方其會飲酣醉淋漓使人忘富貴
利達之念是以多從之遊惟忿時嫉俗無所假借遇
儉壬之士則退而淨漱若銅臭卑陋者去之惟恐不
速矣嘗曰寺僧尤俗吾寧與居特愛其堂宇之濶泉
石之幽耳故儕輩方之唳鶴翔於千仞不肯俯瞰九
臯云以大正五年一月十日沒友生奔哭葬于京南
總持寺墓域從君志也年五十四初在西京與狩野

明倫彙編 家範典 卷一百一十五
君山交病入療院君山來訪因言君以我爲友乎曰
辱交多年何以云然曰朋友有通財之義君今久卧
病醫葯之費未嘗與我謀是面友而非心交也謝曰
偶有所儲所以不相煩也君山意始釋其爲友所重
概此類也著有詩一卷

彪村子曰君清臞長頰與世俗疏不知米價慨然負
大志能談當世之務門前多長者車轍豈古志士之
流亞歟

鳴溪先生詩集

崎陽西田鳴溪先生著

門人等 編次

將遊上海崎陽諸友送到舟賦此留別

江干未忍別風雪撲征裘思似朝宗水誼深同濟舟兵塵

哀浩劫仍時列國聯軍春色及周游却怕滄海柳絲之繫客

愁

送山根立庵東歸次其留別韻

相逢傾蓋是江南準擬同君禹穴探驚世文章誰有匹故
園松迳未開三倉皇何意歸舟急忽漫無情對酒慙此去

春風海東路孱顏潑黛水拖藍

龍華鎮觀桃花

靚：春雲縵漉漉風日暄明霞籠野寺爛錦霽川原舟繫
柳邊渚雞鳴花外村避秦人倘在更欲訪桃源

冶服趁春運紅桃十里花醉粧蒸日豔嬌笑受風斜震蕩
燕秦警嬉遊吳越誇可憐芳草外天遠隔胡笳

哭松原溫三

十載心交唯有君何曾莫逆問雷陳棄孺英妙終軍志仗
劍飄零季子貧已見布衣天下士寧知蛻骨夢中人九泉